

表現を通して生きものを考えるセクター 皆で語り合い、考える「生命誌のこれから」



今年のサマースクールは、昨年に続き、読者参加型季刊「生命誌」編集会議 vol.2 でした。6月に「生命誌のこれまでと、今」を主題とする100号を発行し、次、「生命誌の今、そしてこれから」を主題とする101号（12月発行予定）に向けて、作者の側にいる私たちが享受者の皆さんの思いを知り、実際の企画内容に生かせないだろうかと考えてのことです。生命誌研究館が活動の基本に置いている

「生きているってどういうことだろう？」という問いは、いわゆる科学や学術、芸術といった専門分野の仕事が、社会に享受される際にはたらく根本的な原理だと思われま。何人にとっても、日常生活に生起する何ともない出来事から、それぞれの人が抱く思いは、深いところでこの問いにつながっていくように思われます。ですから、それぞれの人にとっての「生きているってどういうことだろう？」という問いの表れ方を学び、それをこれからは生かしたいと思ったわけです。

ご存知のように季刊「生命誌」の記事本体は Web ジャーナルとして発行しており、これは現代的な情報共有の方法として機能的に優れています。けれども作者と享受者がつながっていることのリアリティがなかなか湧きません。そこで、その手応えを確かめ合う別種の方法として、春夏秋冬、四季折々のお便りが、ポストに、コトン！と届くカード（記事本体をエッセンシャルに紙で表現したもの）を発行しており、二



つを併せることで、先述の問いをめぐっての、地理的に広範囲にわたる「知見の共有（双方向の交流）」の形成（あるいは生成）を目指しています。そのための場として研究館のホームページを営んでおり、その場づくりの成長先端が季刊「生命誌」だと思っています。スクール生の皆さんと語り合ったさまざまな事柄は、一旦、土壌栄養として吸収させていただきました（サマースクールへの参加という形でなくとも、これまでに読者の声として寄せられた事柄もあわせて）。ここからどのような芽が出、花ひらくか、育み続けたいと思います。まずは、当日ご参加の皆さんに御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

村田英克（チーフ）

参加者の感想

「表現を通して生きものを考える」セクターに参加して

参加者 | H.I.



今回初めてのスクールに参加して、改めて生命誌を考えるきっかけとなりました。そして、自分の経験、考えていることと、生命誌のことを比較する機会になりましたことを貴重な経験となりました。その中で、植物・桜草、昆虫・カンタン他主にコオロギ科に関して実際にしていることをそれぞれ、その時代、歴史を考えて、文化誌ととらえて、生命誌の中に取り入れてはいかがでしょうか？という考えに思いついたことが、今回の私自身の成果で、また機会がございましたら、

参加させてください。

わくわくした2日間

参加者 | N.S.



本当に楽しく、わくわくした2日間でした。参加者の皆様、スタッフの皆様と一緒に、一つのことを考えていく作業は、2日間ではもったいなく、もっと続けたいと思いながら帰路に着きました。

参加が決まり、季刊誌をじっくり読み、「生命誌とは何か」を考えましたが、答えが見つかりませんでした。それがまさしく「語り合い、考える」中で、少し見えてきて、最強のチーム力で、季刊生命誌のこれからについて本当によく考えることができました。

人間は食う、寝るという動物の基本に「遊び」を持ったと思っているのですが、今回、こんなに楽しく、知的好奇心を一杯にできる遊びに参加できたこと、本当に嬉しく思っています。今も、「生命誌のこれから」について一人で考えて、楽しんでいます。

サマースクールの感想

参加者 | M.Y.



この2日間で特に印象に残ったのは、一日で2回も発表をしたことです。表現セクターでどうすればより多くの人に生命誌研究館の魅力を伝えることができるのかを、作り手と読み手の目線で議論し合うという経験は、僕にとって新鮮でした。しかし、先生二人の間に挟まれての発表だったので、まだまだ未熟だということを痛感しました。

また、それ以外にもプラナリアの生態を学ぶことができました。例

えば、プラナリアは25℃以下の環境で育てる、頭は一週間で生えてくるので、分裂後も問題なく餌を食べることができる、等の飼育に関する知識を得ることができました。

僕が所属しているネイチャー部でも、発表や展示等でこれらの経験や知識を生かしたいです。

後日、クラブのメンバーにこの二日間のことを伝えて、来年はもっと多くのメンバーでサマースクールに参加させてもらえるようにしたいです。

季刊生命誌のこれまでとこれから

参加者 | M.M.



昨年に続き、表現セクターのサマースクールに参加させていただきました。今回はスクール生が私を含めて3名で、お一人は元教員、もう一人が自分の教え子と、昨年とは少々勝手の違うスクールになりました。とは言え、人数が少ない分、昨年よりも多くの意見や議論をすることができ、また、ブレインストーミングでさまざまな見方や方法を整理して、まとめていく過程は大変楽しく、有意義な時間を過ごすことができました。

時間や費用などのさまざまな制約のある中で、毎回工夫された刊行を続けて来られたスタッフの方々のご苦勞には、改めて頭が下がる思いです。

最後になりましたが、表現セクターのスタッフの皆さま、ご一緒させていただいた受講生の皆さま、本当にお世話になりました。ありがとうございました。読者の一人として、100号に続き、101号の発刊を楽しみにお待ちしております。